

総合学習単位における統合過程としての美術の方法について —中学校における総合学習単位への美術教育的アプローチ—

The Method of Art Education to Constitute 'Synthetic Learning'
—Some Practices of 'Synthetic Learning' Approached from 'Art' at Junior High School—

松原雅俊

1. はじめに

戦後学校教育における教科中心な教育課程のデメリットを改善しようとする方法の模索の中で、既存の学校に学習者中心の経験的学習の場を保障しようとする立場から新設された「総合的な学習の時間」は、教師の工夫・裁量によって、学習者の関心や意欲を高め、学校や地域の個性を生かしたカリキュラムデザインの機会として捉えることができる。ところが、現行教育課程からの移行期にあたり、中学校で一般的に試行される「総合的な学習の時間」に対しては、特別活動のような一斉展開の体験としてマニュアル化してしまっているという批判や、単なるバラバラな活動を容認し、休み時間や放課後を授業に持ち込んでいるかのようなのだという批判もある。「総合的な学習の時間」は、その展開において「時間の浪費」や「単なる活動」という段階に留まる限り、戦後新教育がかつて辿った足跡と同様、「這い回る経験主義」として評価されてしまう危険を孕んでいる。必修教科の時間を削減して新たに設けられたこの枠組みに対しては、賛否両論の評価が錯綜しているが、少なくとも実際の授業を「這い回る経験主義」に陥れないためには、既存の学校環境の拘束を解いていく作業と、「時間の浪費」や「単なる活動」ではない実質のともなう総合学習単位をデザインすることの両方が必要になる。前者は主として制度や物理的条件などカリキュラムの外的事項に関わる改善であり、後者は、教師の工夫に委ねられるカリキュラムの内的事項の改善を意味する。

本論文は、こうした状況にある「総合的な学習の時間」について、そのカリキュラムの内的事項を美術教育的アプローチによって整え、そこに生成する子どもの学習課題を、美術表現を通してまとめ上げていく過程として単元化すること、美術科教師がこれに積極的に関わることの意味について考える。そして、中学生を対象とした実践の評価を通じて、教科としての「美術」と「総合的な学習の時間」との有機的な連関を図る方法を探り、カリキュラムを規定する諸条件の改善へと結びつけていく必要性について述べることを目的としている。

2. 「系統学習」と「問題解決学習」—「二つの契機の統一的理解」のために

戦後日本の学校教育を対象に「総合的な学習の時間」に関する経緯を概観すると、デューイら

を中心とした経験主義にもとづいて、コア・カリキュラム連盟が展開した戦後新教育運動における「問題解決学習」の考え方に辿り着く。「教育と生活の結合」を標榜し、子どもの主体的、総合的な経験を重視した「問題解決学習」の考え方は、その後の「教育の現代化」の動きの中で、「教育と科学の結合」を標榜し「系統学習」の必要を主張する人々から、知識の系統性の欠如と教師の指導性の後退を理由に「這い回る経験主義」という批判を浴びた。これに対し、コア・カリキュラム連盟は、「問題解決学習」と、「系統学習」とは、互いに他を排する関係ではなく、これら二つの契機の統一的理解を求める課題の追求こそが大切である点を強調した。けれども、折しもスプートニクショックが世論をあおる中、学校教育の基本的な方向は、次第に効率的科学の学習へと傾き、昭和33年学習指導要領改訂後の経済成長と昭和43、44年改訂にともなう教育の現代化に連動する学習内容の高度化や画一化へと結びついていった。こうした流れは、昭和52年の学習指導要領改訂にみられるカリキュラムの人間化の動きを尻目に、現実には後期中等教育、高等教育の大衆化にともなう受験シフトの強化と、それに起因する諸種の弊害を生み出しながら、この国独特の学校教育モード²⁾を形成してきた。けれども、近年の産業構造の変化（情報化や国際化）による雇用形態の柔軟化、就学人口の減少（少子化）による受験競争の変容などによって、この学校教育モードは強制力を弱め、融解の危機に瀕している。平成元年の学習指導要領改訂は、こうした状況を越えるために、教科中心主義的カリキュラムを再考し、社会と個人の変化に対応することを重視していた。そして平成10年改訂における「総合的な学習の時間」の導入は、さらに変化し続ける社会と個人を前提に、平成元年改訂の考え方を具現するための方策の一つであるといえる。

こうした経緯をたどってみると、「総合的な学習の時間」が設けられたことは、「系統学習」を重視する教科中心主義的カリキュラムと、「問題解決学習」のプロセスを大切にする経験主義的カリキュラムとの「二つの契機の統一的理解」を、現代の学校教育の場に再び展開しようとする具体的な機会として考えることもできる。そして、その場合、今後の学校教育課程編成にあたっては、その全般を通じて学習者の主体性を尊重しつつ、「各教科の学習」と「総合的な学習」との調和を図るカリキュラムデザインを意図的に進めることが求められることになる。年間総授業時数として、中学校1年生で70～100単位時間、2年生で70～105単位時間、3年生では70～130単位時間を費やすことになる「総合的な学習の時間」には、問題解決過程を含む多様な学習内容や方法が盛り込まれるわけであるが、そのために構成される様々な単位には、「各教科の学習」との有機的な連関が生かされなければならない。

3. 「総合的な学習の時間」を美術科教師がデザインすることについて

平成10年改訂中学校学習指導要領では「総合的な学習の時間」は、生徒、教師、地域性など、学校の状況を生かした個性的なプロセスを大切に、「自ら学び自ら考える力」を育て「学び方やものの考え方」を身に付けるための学習として位置づけられている³⁾。これが趣旨やねらいに則した有効な学習の場として展開されるためには、教科としての専門性が必ずしも必要とされない場面もあるが、逆に機に応じた適切な情報や方法論をいかに提供するかという点では、どうしても専門性が必要になる場合もでてくる。

総合学習単元における統合過程としての美術の方法について

中学校における「総合的な学習の時間」が全面実施されることになると、そのねらいや特徴から、体験や調査研究、ものづくりなどを含む多様な課題の追求を展開し、評価することが多くなると考えられる。子どもたちは、各々の動機に基づいて学習主題を設定し、課題にアプローチする過程で、各自の方法で問題解決を図りながら、そのために必要な資質・能力、態度、方法などを身に付け、発展させていくことになる。

このとき、「主として視覚を通した幅広い認知活動」「思考・判断を視覚情報としてまとめ上げる表現」など美術に特有の営みは、様々な学習活動のきっかけを提供し、共同的な学習を支え、さらにはそれをまとめ、プレゼンテーションする方法を提供するなど、学習単元を構成する上で多面的に生かされ、単元のコアとして機能するものと考えられる。そして、こうした特徴を総合学習単元の構成に生かそうとする場合、その計画・実践のイニシアティブをとる担当者としては当然、美術科教師が適任であることはいうまでもない。「総合的な学習の時間」の趣旨やねらいが効果的に実現されるのであるならば、中学校においては、周囲のコンセンサスを得つつ、美術科の教師が、その専門的能力と経験を生かして単元構成し、学級やその他の小集団を対象に授業を展開することには、評価すべき教育的価値があるのではないだろうか。

以上のような仮説に基づき、以下は、美術の方法を生かした総合学習単元構成の可能性を探るために、平成12年度の自らの実践をふり返りながら、その意味について考えてみることにする。

取り上げる実践は、(1)文化祭の活動と関連を図ったトピック学習およびそこに派生した目的的活動としての造形活動、(2)学習者の共同的な参画を促し、互いの考えを出し合いながら進める目的的活動としての絵画制作、(3)総合学習単元として美術の方法をコアに展開した自然環境保全プロジェクトの3つである。(1)～(3)は、それぞれ、筆者の勤務校の学校教育目標および、その具現を目指す「総合的な学習の時間」の目標との整合を考慮し、子どもたちが互いの個性を尊重し、学び合い、評価し合うことを通じて彼らなりに知的に満たされ、自立に向けた歩みとして学習経験を積んでいかれるようになることを願って実施したものである。

4. 「総合的な学習の時間」の実際における総合と美術の関連

(1) 実践1「演劇の活動をコアにしたトピック学習」

本校では、平成12年度の移行措置期間に「総合的な学習」のうちの13単位時間を、年間のメインイベントである文化祭の発表内容（全員で行う劇および合唱）に関連する主題を生徒が見つけ、それを各自が追求するトピック学習として試行した。

写真1は、その中から提出されたレポートの一つである。3年生のK子は衣装担当で、「権蔵太鼓」というものがたりに登場する龍神の姿をデザインするスタッフになった。劇中の龍神は、自然の猛威の象徴であり舞台において主役と対立する最も重要な役回りである。その姿を表すために、K子は、龍について調べるうちに、龍は架空の動物であること、それが東洋と西洋では違う姿をしていることなどを発見し、レポートをまとめ、さらに龍神の姿をキャストが演じるための衣装をデザインし、作成した。K子の学習をふり返ってみると、

・コアにした文化祭における自らの活動内容から「龍」というテーマをつむぎ出すにいたるまでの、興

味や関心の働きの基づく意志決定。

- ・「龍」についての知識獲得の方法を探り、実際に資料をあたっての情報の選択と収集。
- ・選択された情報からの感想をもとに思考を発展させ、それらを使って報告をまとめること。
- ・目的とする龍神の衣装をつくること。…などのプロセスがある。

K子の「総合的な学習」は、学習動機への感応、意志決定、情報収集、情報選択などの認知活動、それらを視覚情報として



写真1 龍についてまとめたK子のレポート

表現していく統合の過程によって成り立っている。この統合の過程の中軸は、文字や映像の情報によって表したいことが効果的に伝わるようデザインすることであり、それは、いくつかの情報に感応し、集め、選び、止揚する価値創造のプロセスとして評価することができる。

この総合学習单元では、K子同様、多くの生徒が自らの課題として演劇の舞台装置の作成と舞台装飾に関わっている。劇づくりの過程で分業体制をとり、半数以上の生徒が大道具、小道具、照明、音響、衣装などのスタッフとしてこれに携わる。彼らは、「映像や実際のものづくり＝造形活動」を目的的活動として位置づけ、その活動をより効果的に達成するためにモノの背後の歴史、材質や構造などについて、図書資料やインターネット、映像作品の鑑賞などによる多様な情報ソースをもとにまとめ上げ、立体や平面、光や音に表し、舞台上に象徴的に配置したり、キャストとの関連をはかたりする。そこで共通に目指されているのは目的的活動（行事）としての演劇の成功であるが、そのプロセスには、その目的的活動から派生する個別の調査、思考、判断があり、それらをまとめ上げる造形活動（学習）がある。舞台上のキャストの行為との響き合いをねらって計画された舞台装置や舞台美術の制作は、現在の彼らにできる最良の視覚情報としてまとめ上げられている。そして、光、色、形、材料によるこれらの表現は、上演によって多様な直接的フィードバックを得ることで、スタッフ一人ひとりにとっての感応、認知、統合、そして評価のプロセスとして経験されている。

学校のメインイベントを核にしたトピック学習という「総合的な学習」の展開を改めて見直してみると、各学級のおよそ半数の生徒が取り組んだものづくりや舞台の演出などは、そのモチベーションであると同時に、そこに派生する学習を通じて知り得たこと、わかったことを視覚化する統合のプロセスという特徴を持っている。

そこで、こうした特徴を、もう少し角度を変えて確かめるために、生徒同士、あるいは生徒集団と教師の相互作用から派生する問題解決のプロセスや、学習者の主体的、創造的態度の湧出をねらった「総合的な学習」として、「話し合いに重点を置いた共同的な絵画制作」を実践してみた。

(2) 実践2「話し合いに重点を置いた共同的な絵画制作」

①主題創出のための話し合い 本実践は、3年生の選択美術で校舎のピロティに設置する壁

総合学習単元における統合過程としての美術の方法について

画の原型を共同製作するという試みとして行った。メンバーは24名で全員が女子であった。単元は、主題創出のための話し合いに重点を置き、主題への個別のアプローチ、原画の決定、ユニットの制作という構成になった。生徒たちは、ガイダンスの段階で「共同製作による絵画」を行うことを知った上で、積極的に選択してきているので、話し合いは、そこから始めることができた。まず、会議室に集まり、作品テーマおよび、制作の方法について教師を交えてメンバーでディスカッションし、構想を練った。テーマの発想については生徒それぞれの個性に依拠するため、いろいろな発言を求める中から多くの人が共感する部分を次第にしぼることでメンバーの関心を引き出そうとするうちに「私たちに必要なもの」「なくてはならないもの」…「幸せになるために…」という具合に話が発展していった。概念のともなう記号としてのことばによるテーマ決めが半ば煮詰まりつつあるところで、「じゃあシアワセになるためにはやっぱりお金だね。」「お金の絵を描くの?」「お金じゃないよ、やっぱり愛でしょ。」「愛の絵…どうしよう。」…「お金も愛もみんな大切な、でも、時間、幸せな時間が流れているということが大切、私は、時間のシンボルとしての時計を描いたらいいと思う。」「うまくいえないから描いてみない…」…と、次第に絵に表すためには、あるいは絵として表す「幸せ」とは…ということに話し合いの方向が定まっていき、最終的には「シアワセになるために…愛・お金・時間…」というテーマに基づくアイディアスケッチに移行していった。

②方法の決定のための話し合い 共同製作をめぐる、生徒たちからはじめに提案された方法は次の三つに大別される。

- ・一人ひとりのユニットを決め、テーマを意識して個別に表した作品をそのまま構成する。
- ・全体の図を予め決め、それを分割して分担し、色と形を忠実に描いて後でそれを構成する。
- ・全体の図を予め決めておき、みんなで相談しながらテーマに沿った一つの絵を描いていく。

コラボレーションの方法を巡る話し合いの焦点は、別々のモノを集結させて偶発的にできあがるイメージをテーマとの連関で捉えるのか、テーマに沿ったイメージをつくり、それを分担して描いていくのかということになった。そこで、「それぞれの考え方の人で二つの作品に取り組んではどうか」と提案したところ、「それではだめ。全員でやることに意義を感じている。」という意見が多く、「それでは…」とある生徒の提案で、「まず、テーマに沿った原画を皆でつくり、それを分担した部分を表すのにはそれぞれの人のイメージを生かして制作し、それを再構成してみる。ユニット同士のつながりについては細かく合わせる必要はなく、ズレたり、色がつながらなくともそれを認めてやってみよう…原画のアイディアは、全員がテーマをもとに考え、その中からいくつかを投票によって選び、図案を決めよう」ということになった。ここには相対立する二つの考えをもとに、両者の折り合いを付けて新たな方法の止揚を試みる弁証法的な意識の働きを見て取ることができる。

③主題への個別のアプローチ～原画の決定をめぐる話し合い 時間をかけた話し合いから生み出された共同絵画のテーマにもとづいて、一人ひとりがそれをどのように絵に表すかを検討し、アイディアスケッチに番号を付けて掲示し、その中から良いと思うもの2点ずつを投票することになり、その結果、Aのアイディアが最も多くの票を得、それにB、Cの2点が準じる形になった。

しかし、ここで新たな課題が発生した。それは、「一番多くの票を得たAは確かにいいが、少し物足りない。せっかくだからB、Cの作品の良い点をAと合成して画面をつくることはできないか。」というのである。ここからは、Aのアイデアを尊重すべきだとする意見と、合成してみてさらに効果が上がるのならやってみようという意見が対立したが、結果的にはAの発案者が後者の意見を支持したことから全体の考えが複数の画面を合成する方に傾き、AをベースにA、B、Cを合成することに決まった。画面の合成は、Aの発案者が担当し、それぞれをスキャナでコンピュータに取り込み、ペイントソフトを使って再構成することによって原画の形ができた。

④主題へのアプローチ～ユニットの制作 各々の生徒が担当するユニットは、原画を拡大コピーし、これを25等分したものに番号を付け、抽選によって決めた。決定した自分のユニットを表す方法は、各自に委ねられる。生徒は思い思いにユニットを制作した。制作の過程で隣り合うユニットとの線のつながりや色のつながりを相談する姿も見られたが、敢えて合わせることはしない生徒もいた。こうして作り上げられたユニットを原画に基づいて組み合わせ、部分から全体を構成し、共同の原画作成を終えた。

この実践では、共同的な造形活動を進めるにあたって、生徒一人ひとりがその主題内容、制作方法に主体的、創造的に絡んでくることを意図した話し合いやイメージづくりを行ったが、そのプロセスにおいては、他者との相互作用からの感応、認知の連続があり、それを、個人ではなく共同的に統合する問題解決過程としての意味があるのではないかと考えられる。

「実践1、2」における造形活動は、総合学習単元としての個別のトピック学習や、共同

的な相互作用を生み出す話し合いなどの経験的学習を、動機付け、まとめ上げる過程として機能していた。このことから、さまざまな問題解決の過程を美術的表現で展開し、締めくくるという統合過程としての美術教育的アプローチは、「総合的な学習」を構成する上で有効な学習経験としての価値をもつのではないかと考えられる。そこで、こうした特徴をさらに明確化するために、中学校1年生全員を対象に学級単位で展開する総合学習単元を計画・実践してみた。

(3) 美術的表現をコアとして位置づけた「総合的な学習の時間」における学習の実践

現在の日本における「総合的な学習の時間」においては、「個性の発達」という視点からは、個別的なリアリティの追求が求められるし、「社会の変化」という視点からは、情報社会、国際社会

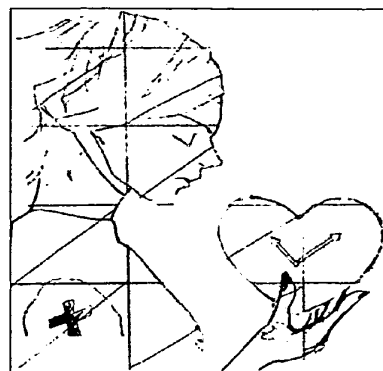


写真2 Aの作品（部分）

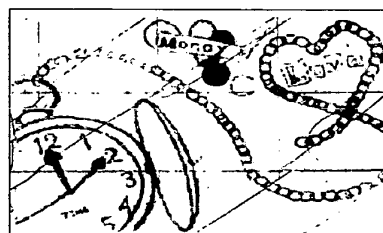


写真3 Bの作品（部分）

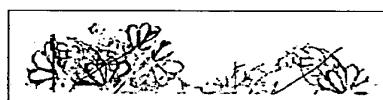


写真4 Cの作品（部分）

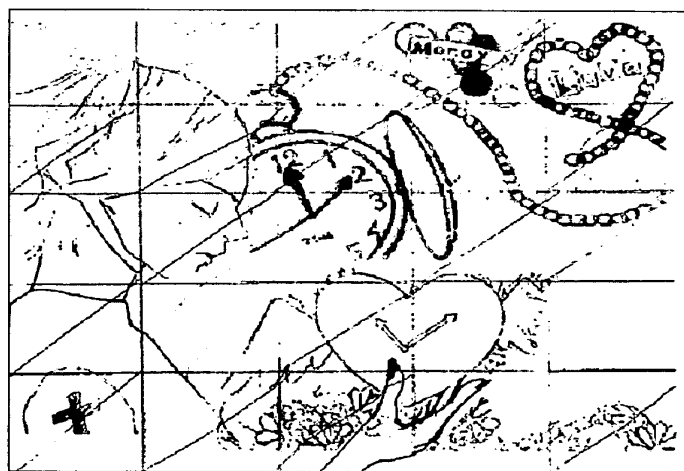


写真5 話し合いにより決定し合成された共同製作原図

総合学習単元における統合過程としての美術の方法について

といった状況の中での環境、福祉、人権などの現代的な教育課題への接近が求められる。ここでは、「実践1, 2」における美術表現の統合過程としての効果を踏まえ、20世紀初頭のアメリカ進歩主義教育の実践⁴⁾を参考に、現代的な教育課題への取り組みとして総合学習単元を構成、試行してみた。単元は本校の地域に流れる川やそれに関わる人々を生かした「総合的な学習」＝「いたち川環境保全プロジェクト」としてデザインし、観察・調査、情報の収集と分析、視覚表現を統合過程とする教材の方法的配列によって実施した。実践のあらまきは次の①から⑤のようなものである。

①**地域の環境を取材しよう** 環境アセスメントに基づいて改修された学区の川や森に、カメラを持って取材に出かけた。取材のポイントは、「これからも残したい風景」「改善したい風景」など、学習者の生活感覚からプラスイメージで捉えられる映像と、マイナスイメージで捉えられる映像の両方を後で選ぶという前提で工夫して撮影するよう伝え、撮影された写真の中からプラス、マイナスの相対立するイメージの作品を各1点ずつ選び、提出されたものを掲示した。

②**作品鑑賞と講話** 美術科の授業で地域教育力として授業への協力をお願いしたことのある地域在住の版画家、宗森氏⁵⁾の作品である地域広報誌の表紙絵や、地域の民話をもとに作成された「版で表された紙芝居」などを廊下に掲示し、その感想やそこから興味を感じたことなどを発表する場面を持った。さらに、地域の自然環境や伝統芸能に詳しい宗森氏から、改修された地域の川とその環境保護のためのゴミ集めの活動について講話をしていただき、生徒にはその感想をもとめた。

③**レポートの作成** 写真による取材、宗森氏の講話などから持った感想をきっかけに、レポートを作成した。コンピュータ教室に図書資料を持ち込み、必要に応じて、多様な情報検索ができるようにし、取材や鑑賞、講話などの学習活動をもとに、写真入りレポートを作成する場を設けた。

④**ビジュアルにまとめよう** ポスターの制作に先駆け、本単元におけるこれまでの経験からプラスイメージの色、マイナスイメージの色と題して生徒一人ひとりの感覚からペイントソフトによる共通課題としての色面構成を行い、発想のための資料として全員の作品をつないで掲出し、そこから感じ取られる色彩の特徴について考える時間を持った後、それまでの取材、講話、調べ学習、レポート作成の活動をもとに主題を決め、それに基づいたポスターや絵画の表現を行い、視覚情報化した。その制作に際してはこれまでの美術の学習を生かし、今回の単元の意味を考えながらモチベーションの高い統合過程として経験されていたと考えられる。

⑤**地域に発信しよう** 生徒がつくり出した情報としてのポスターを、地域に向けて発信するため、地区セン



写真6 写真による地域の川の取材



写真7 レポートの作成

ター、区役所との連携により、実物を京浜東北線「本郷台」駅に展示し、地域の川の環境保全や、川と子供との関わりについて一般の人々に伝えることを試みた。

美術教育的アプローチを軸に、美術科教師が展開する総合学習単元の方法の模索として試行した本単元は、⑤までで一段落である。これまでの表現や調査、体験などを通して感じたり、考えたことを、地域清掃など実際のボランティア活動として展開したり、学年や全校規模の

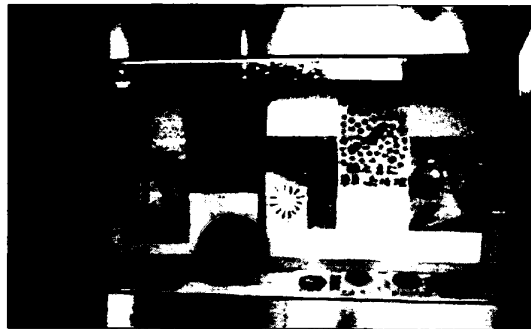


写真8 京浜東北線本郷台駅での展示

体験的総合学習単元へと結びつけていくことなど、今後に向けた課題の発展性も考えられる。全校あるいは学年といった大規模な学習集団を対象とする単元との密接なつながりをつくり出しながら、学級などの中規模の学習集団、さらに課題選択的に構成した小集団を対象に、こうした単元構成を工夫していくことは、本論文の目的に接近するための有効な実践として考えることができる。

5. 実践をふり返って

4. の(1)～(3)の実践では、それぞれの問題解決過程を通じて知り得たこと、わかったことなどを視覚化する統合のプロセスとして造形活動の特徴が生かされ、単元のコアとして機能している点で共通している。これら統合の過程で用いられる光、色、形、材料などを、子どもたちがそれぞれの場面に応じて適切、有効に活用できることは、言語や文化を超えて情報化、国際化が進展するこれからの時代を生きていくのに欠かせないリテラシーとしての側面をもっていると考えられる。つまり、例えば、光、色、形、材料など様々な造形要素の意味や、その適切な使い方などを「美術」の内容・方法として予め知っていること、あるいはそれらが経験的に学習されていることが、総合学習単元における学習者の個性的な主題へのアプローチを可能にし、そこでの思考・判断・表現を下支えするという事実は、教科としての「美術」で扱われる学習内容・方法の質的充実を図ることが、今後の学校教育課程において、いわゆる「生きる力」を育む上で重要な課題となる可能性を示唆している。

6. おわりに

情報化、国際化、少子高齢化が進むこれからの社会を前提とする学校教育課程を、人々が生涯にわたって学び続けながら生きていくための「基礎・基本」課程として考えるとき、教師の課題は、一人一人の学習者が、感覚、感情、知識、技能など、その学びのもととなる様々な要因を総合的に自らのうちにまとめ上げ、多様な機会を通じてそれらを統制しながら生活していくことができるように彼らを扶けることであると考えられる。学校教育においては、そのために個に応じた個性的カリキュラムを展開することと、さまざまな関係の中で他者理解を促し、個性を生かす術を獲得できるようにすることの両方が大切な課題になってくる。こうした課題に接近するため、筆者は、教科としての美術の個別的な展開を重視し、子どもたちの共同的な造形活動⁶⁾をデザインしたり、美術による共同の輪を地域へと広げた学び合い⁷⁾を展開したりすることによって、学

総合学習單元における統合過程としての美術の方法について

学校教育課程全般を活性化させる方策を探りながら実践と考察をくり返してきている。これら美術を生かした学びの展開は、学習者の全人的な「基礎・基本」更新の方策として造形・美術が柔軟で拡張性をもつ極めて優れたツールである点を浮き彫りにし、そのために多様な「美術の教育」が必要であることを焦点化している。

今回は、こうした流れを受け、実際に授業として計画される「総合的な学習の時間」を動機付け、まとめ上げていく統合のプロセスとしての美術の意味と今後の可能性について考えてみた。「総合的な学習」における様々な学習動機を提供し、そこに展開される情報収集・思考・判断、表現、評価を、ひとまとまりの時間の流れとして構成していこうとすると、「光、色、形、材料などの諸要素」に支えられた美術の表現および鑑賞における「みること」「デザインすること」「えがいたりつくったりすること」は、そうしたプロセスを展開するために欠かせない感応、認知、統合の営みとしての側面をもっている。総合学習單元における美術教育的アプローチが豊かさを増すことにより、そこに求められるこれらの能力の充実が今後を見据えたりテラシーとして人々に求められるようになれば、教科学習として展開される美術科教育は、必然的に学校教育に不可欠の価値として現在よりも重視される必要が出てくる。そして、このことは、学校教育課程を制度の面から規定するカリキュラムの外的事項に対する、カリキュラムの内的事項からの訴えとして、その改善にも結びついていく可能性をもつものと考えられる。

取り上げた実践は、特定の学校、教師、生徒によるいうなれば特殊な性質のものである。けれども、こうした特殊な実践の事実を評価、分析しつつ、その実践を支えるために学習者にとって欠くことのできない美術の知識や技能を紡ぎ出し、その中から教授内容として一般化が求められる美術科教育における内容、方法への示唆を汲み取り、必修教科としての「美術」との有機的な連関を形成していくことが大切であると考えられる。美術科の教師による「総合的な学習の時間」への積極的な関与は、教科としての美術科における構造（ディシプリン）の再構成を彼岸においた実践的研究課題の一つとしても捉えられるのではないだろうか。

註

- 1) 中内敏夫『教育学第一步』岩波書店、1988、38-41頁。中内は、教育施設の整備や教育費の支出などを「外的事項」教育課程の編成や実際の授業などを「内的事項」とする国家管掌限界説を取り上げ、カリキュラムの内的事項と外的事項双方への国民の関与による公教育の計画化が重要であると述べている。
- 2) 金子元久・小林雅之『教育の政治経済学』放送大学教育振興会、2000、192-200頁。戦後日本の学校教育は、子どもの健やかな成長発達を促す場として機能する一方で、彼らを人材として考え、社会的役割に向けて分配するために機能する…という二重構造をもっている。そして現在、その後者が大きく膨らみ、前者が意味を失いかけていることへの批判が高まりを見せている。金子元久は、こうした二重構造の原因となってきた日本特有の教育システムを「Jモード」として示している。「Jモード」は、経済成長と福祉の実現を図る装置として、ある程度有効に機能し、二重構造の弊害に対する批判を長い間押さえ込んできた。けれども近年、就学人口の減少（少子化）による受験競争の変容、産業構造の変化（情報化や国際化）に伴う雇用形態の柔軟化などによって、その強制力を弱め、批判を増幅させている。

3) 平成 10 年改訂中学校学習指導要領総則編

…総合的な学習の時間の趣旨（第 1 章第 4 の 1）

1 総合的な学習の時間においては、各学校は、地域や学校、生徒の実態等に応じて、横断的・総合的な学習や生徒の興味・関心に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動を行うものとする。

…総合的な学習の時間のねらい（第 1 章第 4 の 2）

2 総合的な学習の時間においては、次のようなねらいをもって指導を行うものとする。

(1)自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。

(2)学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探求活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること。

- 4) 佐藤学『米国カリキュラム改造史研究』東京大学出版会、1990、110-114 頁。造形表現的行為を統合過程として取り入れた総合学習単元の形は、1900 年代初頭より現在までに幾筋もの試みがあり、それぞれが社会状況との相互作用の中で教材観、学習観を変化させながら試みられてきているが、それらはいずれもデューイ・スクールにおけるテーマであった「子供の経験と表現を軸として学校教育を再構成し、自己実現の成長過程が同時に社会的目的の実現過程となる教育の方法を探究すること」に通底する部分をもっている。例えば 1900 年代初頭、「社会的効率主義」への批判を子供の要求に即した教科の統合と総合単元の開発によって展開したジュニアス・L・メリアム (Junius.L.Meriam) による実践は、

- ① 子供の直接的な興味に応じること
- ② 一般的な事項としてではなく具体的な活動として表現すること
- ③ 個性に応じること
- ④ 柔軟な配列であること
- ⑤ 作業と余暇の両者を含むこと

…などをカリキュラムの構成課題に位置づけ、その具体的な展開として当時の「産業的知性」の発達をねらったトピック学習を、実験、観察、調査、参考資料の収集と分析、数量的な比較、討論、地図の作成、絵画表現などの多様な学習活動として組織していた。当時は、第 2 次産業構造を中心とする進歩の時であり、その産業社会への参入を前提に、子どもたちには「個性の発達」と「社会の変化」のバランスを原理とするカリキュラムを用意していく必要があったことから、実際の単元は、蒸気機関車や船、町作りなどを学習題材としてこれらのトピックの選択的 pursuit とものづくりや絵画がそのプロセスに位置づけられていた。こうした実践的研究は、今日の日本における「総合的な学習の時間」の基礎を成すものとして、本研究の目的とも深く関連するものである。

- 5) 平成 12 年 10 月に、地域教育力として、美術科の授業に参加していただいた地域在住の版画作家。地元広報誌をはじめ、地域に密着した様々な印刷物の表紙や挿し絵を担当している。また、川的环境保全のために清掃活動や諸調査を行う地域ボランティアとしても積極的に活動する地域の人材である。
- 6) 拙稿「中学校における共同的造形活動に関する一考察」『美術科教育学』第 21 号、2000、255-264 頁。
- 7) 拙稿「美術による学びのネットワークの可能性」『美術科教育学』第 22 号、2001、247-257 頁。

総合学習単元における統合過程としての美術の方法について

The Method of Art Education to Constitute ‘Synthetic Learning’ —Some Practices of ‘Synthetic Learning’ Approached from ‘Art’ at Junior High School—

MATSUBARA Masatoshi

In the new elements of school curriculum, ‘Synthetic learning’ is regarded as an important factor. It is ‘The way of curriculum organized by experience’. There are various approaches to ‘Synthetic learning’ to make it effective. Several ways from art education have some possibilities that constitute ‘Synthetic learning’. For example, people can combine many elements of their learning by ‘images’, and make their relationships through ‘arts and crafts’. I consider these characteristics of arts have functions to motivate various experiences, and to realize individual thinking. Therefore, we need many opportunities of art education for the future.